日蓮聖人と極楽寺良観房忍性

三浦日脩

はじめに

日蓮聖人は法華経を以て、滅後末法流布の正期とし、就中、本門八品に顕説される上行所伝の要法、本因下種の南無妙法蓮華経を下種する事によって結縁し、成仏の種子とされたのである。

諸宗無得道の意はこれに依拠するもので、文応元年（一二六〇）に進覧した『立正安国論』は、上行日蓮としての姿勢を示され、仏勅を蒙った仏使としての行動が始まったと拝されるのである。

文永五年（一二六八）に著された十一通の御書中の『与建長寺道隆書』（定四三〇）には、

念仏者無間地獄ノ業、禅宗ハ天魔ノ所属、真言ハ亡国ノ愚法、律宗ハ国賊ノ妄説ト云云。

と示され、「四箇格言」として伝えられている。

又、末法に於て法華経を誹謗する三類の怨敵を挙げ、「僭聖増上慢」について『開目抄』（定五九〇）に勧持品の、

悪世中ノ比丘ハ邪智ニシテ心諂曲ニ未ダ得ザルヲ為得タリト謂ヒ我満ノ心充満セリ。

の文を引いて、この人物として極楽寺の良観房忍性と建長寺の道隆を指している。

幕府の要人に接近し、権力に媚び、大きな伽藍を造営したり、私腹を肥やし、自ら錯覚して覚者と思い込んだりする姿を日蓮聖人は良観房忍性や道隆に見たのである。

良観房忍性は日蓮聖人より五歳の年長で、しかも日蓮聖人入滅より後、二十一年の長命であった。

この両者が鎌倉の地に於て弘通し、法敵として相対した時期は、建長五年（一二五三）より建治元年（一二七五）の二十二年間であった。

法華経を以て最勝の仏法とし、世を治める事は、秩序ある社会の実現にこそ、民衆の幸福が得られる事を日蓮聖人は北条幕府に対して諫言し続けたのである。

それに対して良観房忍性は、西大寺叡尊の弟子として学んだ律宗から、勧進聖として受容した文殊信仰、太子信仰の上に、真言密教による祈祷や念仏信仰を取り込み、民衆に接し、為政者の外護をうける信仰姿勢は、日蓮聖人にとっては決して許されない謗法の輩であった。

一、良観房忍性の修験者的回国行と勧進聖的要素について

良観房忍性は、建保五年（一二一七）七月十六日、伴定行の子として大和国城嶋に生まれた。安貞二年（一二二八）十一歳の時、両親を伴い、信貴山に詣で、肉食を断ったと云われる。[1]

この信貴山は、毘沙門天信仰をはじめ文殊信仰、四天王信仰、太子信仰が毘沙門堂を中心に行われ、所謂民俗信仰の場に浴した。

寛永元年（一二三二）、十六歳で母が没し、遺骨を額安寺に納めた。[2]

ここでは三ヶ月程の滞在であったが、興福寺の末寺であったため、虚空蔵菩薩信仰や、時宗僧の集団がこの寺に詣でていたため、浄土信仰の影響をうけた事も考えられる。

又、桜井の阿部寺とのつながりは、良観房忍性が行基に対する強い憧れがあり、この寺で文珠信仰や修験道等を修している。十九歳の時、生駒の竹林寺で受戒し、諸食事を断じ、五字を誦し、五万余遍を誦したと記されている。[3]

このように、少年時代より多様な信仰生活を送り、密教の加持祈祷を主とする験者や聖などと接触する中で、これら僧侶の一群として行動していたと考えられる。この体験が将来の良観房忍性にとって、自身の体質となっていった事に注目する必要があると考える。

二、西大寺叡尊と良観房忍性

西大寺叡尊との出会いは、仁治元年（一二四〇）、良観房忍性が二十四歳の時で、当時叡尊は西大寺の復興のため、暦仁元年（一二三八）、四天堂を中心に加持祈祷を修して民衆の帰依を得、次第にその実をあげていった。律宗として鎮護国家寺院としての形をとりながらも、復興の要因として大きなものがあった。

良観房忍性は、興福寺の影響を多分に受けた生駒地方の寺院を経験する中で、西大寺の復興に尽力する叡尊を知り、弟子となり沙弥戒を受けた。

西大寺では僧侶の身の廻りの世話等の雑用をしていたようで、叡尊の『四分律行事鈔』の講義を聞く折に、良観房忍性は書物を奈良から京都へ往還して借り集めたり、覚如が定舜を伴って入宋した折に、律書を持って帰朝

した定舜のもとへ九州迄受け取りに行ったとの事で、学僧でなかった事がわかる。しかし、叡尊の戒律関係の経典講義の聴講や、授戒の行為を通して、戒律の知識や実践の重要性を身につけた事はそれまでの経験ではなかった事で大きな意義であった。(4)

西大寺の復興が進められる中、良観房忍性は五年後の寛元三年（一二四五）、三十三歳の時、西大寺を出て東国へ向かったのである。

その理由として考えられる事は、叡尊が西大寺の復興に成功し、重要な地位を築きあげた事を知るにつけ、自己の立場を失ったことが考えられ、又、これまでの修験者的な要素、勧進聖として回國行的な要素が良観房忍性をして、一ヶ所に永住することができなかったと指摘されている。(5)

東国への移住が決定的となったのは、建長四年（一二五二）三十六歳、鎌倉に行く事になるが、八月鎌倉に到着、翌月鹿島社に詣で、十二月に常陸の三村寺に到り、そこに律院を造り、十年間滞在している。この地で多くの帰依者を得た。その中に北条重時がいた。

三田村に於て、北条時頼の病気平癒を祈願した事が縁となり、鎌倉との結びつきが一段と深まったと考えられる。弘長二年（一二六二）四十六歳、鎌倉清涼院の釈迦堂に入り、翌年には多宝寺に移った。

良観房忍性は、叡尊の鎌倉下向のために、幕府との接触を一層密にし、西大寺流を鎌倉の拠点にする事を策略したと考えられる。この年、叡尊の鎌倉下向が実現したが、良観房忍性は三村寺より、経典や諸道具を大量に運んだ事をみても、積極的な働きをした事がわかる。文永二年（一二六五）には、北条長時が信徒となり、江ノ島で祈雨を行っている。

極楽寺については、北条重時が良観房忍性に再興の地を選択させ、現地に建立。文永四年（一二六七）に寺主

として迎えたのである。五十一歳であった。このとき良観房忍性は、丈六の阿弥陀仏像を安置している。[6]

三、日蓮聖人と良観房忍性との接点

日蓮聖人は、良観房忍性より五歳年下である。

日蓮聖人が、建長五年（一二五三）、房州旭ヶ森で法華宗の開宗を宣言され、この年、鎌倉での布教が始められるが、良観房忍性は、建長四年、西大寺を出て常陸三村寺に入っており、二人の出会いはまだない。

正嘉元年（一二五七）から鎌倉を中心にした大旱魃や疫病等の災害に対し、翌二年より三年間に亘り駿府岩本実相寺に大蔵経を閲覧、その災いの根元が法然の『選択集』に起因する事を究明、文応元年（一二六〇）、最明寺入道時頼に『立正安国論』を進覧。これに対し幕府は農民を煽動し、松葉ヶ谷の草庵を焼打にした。日蓮聖人は、一時下総の富木胤継の邸に難をさけたが、再び鎌倉に帰り諸宗批判を展開した。良観房忍性は、鎌倉での日蓮聖人の行動については当然耳にしていたと考えられる。

弘長元年（一二六一）、四十六歳の良観房忍性は、時頼によって鎌倉光泉寺の住持に招請されている。[7] この時期、日蓮聖人は幕府により、伊豆流罪になっている。翌弘長二年、西大寺叡尊は北条時頼の招きにより、鎌倉に下向している。叡尊下向の理由として、当時の鎌倉における念仏信仰の蔓延により、念仏僧の堕落が顕著にみられ、幕府はこれら僧侶の風紀を取り締まるため、戒律を以て念仏僧の堕落を制御するため、叡尊にその役割を依頼したと云われている。その働きかけをしたのが良観房忍性であった。[8]

弘長三年（一二六三）二月二十二日、日蓮聖人は伊豆流罪赦免となり、鎌倉に戻り、翌文永元年には、故郷小

湊に帰郷、母妙蓮の病気平癒を祈り、四ヶ年の寿命を延ばした。

『可延定業書』（定一八二七）に、

されば日蓮悲母をいのりて候しかば、現身に病をいやすのみならず四ヶ年の寿命をのべたり。

とあり、又、師匠道善房を蓮華寺に訪ね、捨邪帰正をすすめている。『善無畏三蔵抄』（定六五九）に、

彼人ノ言ク我智慧なければ請用の望もなし年老いていらへなければ念仏の名僧をも立てず世間に弘まれる事なければ唯南無阿弥陀仏と申計り也、又我心より起らざれども事の縁あって阿弥陀仏を五体まで作り奉る。是又過去の宿習なるべし。

とある。この文をみても、当時、念仏信仰が広く民衆に受容されていた事がわかる。

この年十一月十一日、日蓮聖人は天津の地頭工藤吉隆の邸へ向かう途中、小松原に於て、東条郷の地頭景信の襲撃をうけ、弟子鏡忍房は犠牲となり、日蓮聖人も眉間に傷を負った。

『南条兵衛七郎殿御書』（定三二七）に、

自身もきられ打たれ、結句にて候し程に、いかが候けんうちもらされていきてはべり。

と述べ、さらに同抄に、

されば日本国の持経者はいまだ此経文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ我不愛身命但惜無上道是也。されば日蓮は日本第一の法華経の行者也。

と、法華経の行者、上行日蓮としての自覚への推移が見られるのである。

この年十月には、長さ一丈もある大彗星が現れ、二ヶ月あまり天が荒れ、鎌倉では洪水が起り、地震も相つぎ、翌文永二年には関東に泥雨が降ったと『吾妻鏡』に記されている。比叡山では、衆徒が自ら堂宇に火を放ち、講

堂や戒壇院を焼き、洛中にくり出し、幕府は比叡山の衆徒の武装を禁止している。東條景信も変死した。この年、北条長時は良観房忍性の信者になっている。

四、日蓮聖人と良観房忍性との対決

文応元年（一二六〇）に即位した蒙古のフビライは、元国皇帝として国勢を増大させ、高麗も手中に収め、南宋攻略をすすめる中で日本への侵攻をおし進めていた。

文永五年（一二六八）正月、蒙古の使者が国書を持参し、九州太宰府に到着した。国書は正月八日、鎌倉に送られ、二月上旬、京都御所に転送されている。

日蓮聖人は、文応元年に幕府に対し進覧した『立正安国論』が、現実にわが国の危機として直面した事実を見極め、文永五年四月五日、法鑑房に対し、『安国論御勘由来』（定四二三）を著している。

他国ヨリ此ノ国ヲ破ル可キ先相ナリ、自讃ニ似タリト雖モ若シ是ノ国土ヲ毀懐セバ復仏法ノ破滅疑ヒ無キ者也。

と述べ、又、同抄（定四二三）に、

日蓮復タ之ヲ対治スル之方之をヲ知ル。叡山ヲ除イテ日本国ニハ但一人也。

と述べられている。

更に八月二十一日には宿屋光則に対し、謗法の科によって起る二難、他国侵逼の難、自界叛逆の難を防ぐのは、この日蓮をおいて外にない事を『宿屋入道御書』（定四二四）に示されている。

日蓮聖人は十月十一日付で、十一通の諫暁書を呈した。それは為政者である政治上の敵と、仏教者である法義上の敵とに分けられる。

政治上の敵は、執権北条時宗、執権に諫状を進達する宿屋入道光則、執権の家司で侍所の平左衛門頼綱、北条家一門の北条弥源太の四名。次に法義上の敵は、鎌倉仏教界に於て、幕府との繋がりが強い建長寺の道隆、極楽寺の良観房忍性、大仏殿別当、寿福寺、浄光明寺、多宝寺、長楽寺の七ヶ寺、合計十一通の諫暁書を呈したのである。

『与北条時宗書』（定四二六）には、

国家ノ安危ハ在リ二政道ノ直否一ニ仏法ノ邪正ハ依ル二経文一ニ。

『与宿屋入道書』（定四二七）には、

希被レ停二止御帰依ノ寺僧一ヲ宣ク令レ帰二法華経一ニ若シ不レンバ然ラ者後悔何追フ。

『与平左衛門尉頼綱書』（定四二八）には、

併貴殿者為リ一天ノ屋梁一為リ万民ノ手足一。争カ此国滅亡ノ事ヲ不レンヤ歎カ耶不レンヤ慎マ。早ク須ク加ヘテ退治一ヲ制ス謗法ノ咎一ヲ。

『与北条弥源太書』（定四二九）には、

所詮止メテ二諸宗ノ帰依一ヲ可レシ令レ信二セ受一乗妙経一ヲ之由捧ケ勘文一ヲ候。日本亡国ノ根源ハ起レリ自ハ浄土・真言・禅宗・律宗ノ邪法悪法一。召シ合セ諸経ノ勝劣ヲ分別セヨ。

とあり、法義上の敵に対しては、『与建長寺道隆書』（定四三〇）には、

此書ノ所詮ハ念仏・真言・禅・律等ノ信二ズル悪法一故ニ天下災難頻リニ起ル。

『極楽寺良観書』（定四三二）には、

良観上人ノ住処ヲ説テ法華経ニ云ク或ハ阿練若ニ納衣ニシテ在テ空閑ニ。阿練若ハ翻ス無事ト争カ日蓮讒言スルノ条住處相違セリ。併カラ似三学ヲ矯賊ノ聖人也。僭聖増上慢ニシテ而今生ハ国賊、来世ハ堕ニ在センコトト那落ニ必定セリ矣。

『与大仏殿別当書』（定四三二二）には、

日蓮兼テ而勘ヘ申セシ立正安国論ニ少シモ不相違。急カニ加ヘ退治ヲ給ヘ。然ラバ者於ケイテ日蓮ヲ而不レ可レ叶レ之。早ク到シテ我慢ヲ可レ帰ス日蓮ヲ。今生空シク過サバ後悔何ソ追。

『与寿福寺書』（定四三二三）には、

依テ法華不信ノ失ニ皆一同ニ後生ハ可レ堕ツ無間地ニ早ク翻スベシ邪教ヲ捨テ達磨ノ法ヲ可レ令ム帰セ一乗正法ニ。

『与浄光明寺書』（定四三二四）には、

是併カラ鎌倉中者麤ノ類・律宗・禅宗等カ向テ国王大臣ニ誹謗説我悪之故也。早抛テ二百五十戒ヲ而可下帰シ日蓮ニ明上ス成仏ヲ。

『与多宝寺書』（定四三三五）には、

従ヒ雖モ日蓮ヲ悪シ於テハ所レ勘ズル相当ルニ何ソ不レ用ヒ哉。早集メテ一所ニ而可キナリ有ル御評議。

『与長楽寺書』（定四三二六）には、

早ク捨テ邪法邪教ヲ可帰ニ実法実教ニ。若無ンバ御用ヒ者今生ハ亡シ国ヲ失セ身ヲ後生ニハ必可レ堕ス那落ニ。

とある。

以上挙げた十一通の御書の中、『極楽寺良観書』には、良観房忍性を僭聖増上慢と指摘し、三類の怨敵中、最も極悪の比丘と示し、「今生ハ国賊堕ニ在センコト那落ニ必定也」と批判している。

表の顔は、生身の如来と尊められているが、裏の顔は衆生を惑わす極悪の僧の姿を見るのである。文永二年

（一二六五）に著された『聖愚問答抄』（定三五三）には、

就中極楽寺良観上人は上一人より下萬民に至て生身の如来と是を仰ぎ奉る。見ルニ彼ノ行儀ヲ実ニ以テ尓也。飯島の津にて六浦ノ関米を取っては、諸国の道を作り七道に木戸をかまえて人別の鐵を取ては諸河に橋を渡す。

と、関所を設けて銭を取り、慈善事業を行っているようにみせる僭聖増上慢の姿をみることができる。

文永六年の早魃には、良観房忍性は、江ノ島に於て祈雨の法会を修している。幕府に対する誇示行為であったが、これは不成功に終っている。

同年の五月、幕府は日蓮聖人の信者、富木胤継、四條金吾、太田乗明の三名を問注所へ招換し、迫害に及んだ。日蓮聖人は『問注得意抄』（定四三九）に、

設ト敵人等雖レモ吐クト悪口ヲ各々当身ノ事一二度マデハ可シ如ク不レ聞カ。及ブノ三度ニ時不レ変ヘ顔猊ヲ不レ出カ麤言ヲ以テ耎語ヲ可レ申ス各々ハ一処ノ同輩也。於テハ私ニ全無キ違恨ノ之由可レ被申レ之ヲ欤。

と示され、これは個人の問題ではなく、あくまで仏法の大義にかかわる問題として意識を持つことを指示されているのである。

十二月八日には、既に九年前に幕府に進覧した『立正安国論』の予見が現実のものとなってきた危機を、「是偏ニ非ズ日蓮之力ニ法華経真文所至ノ感應ノ欤」と奥書として著されている。

殊にこの年に著された、三位房に与えた『法門可被申様之事』（定四五四）には、

日本一洲上下萬人一人もなく謗法なれば、大梵天王・帝桓竝ヒニ天照太神等隣国の聖人に仰セつけられて謗法をためさんとせらるるか。

とあり、法華経を誹謗する日本国は、諸天善神がこの国を去った。この謗法の国、日本を自覚させるために、自

界叛逆、他国侵逼の二難を以て隣国の蒙古にためされているのだと指摘されているのである。

七、八百人の真言師、禅宗や律宗僧によって行れた変成男子の祈祷が不成功に終った事実をあげて、天台宗が真言密教を受容した堕落天台、禅宗や念仏の謗法を止めるには、この日蓮の起用なくしては実現できないと述べ、

先ッ世間ノ上下万人云ク八幡大菩薩ハ正直ノ頂ニやどり給フ、別のすみかなし等云云。世間ニ正直ノ人なければ大菩薩ノすみかましまさず。又仏法ノ中に法華経計リこそ正直ノ御経にておはしませ。法華経の行者なければ大菩薩の御すみかをはせざるか。但シ日本国には日蓮一人計リこそ世間出世正直ノ者にては候へ。

と、仏使としての仏勅を蒙った姿勢を明らかにされている。

この時期に著された日蓮聖人の著述には、『善無畏三蔵抄』『真言七重勝劣』『真言天台勝劣事』等が挙げられるが、いずれも法華経と諸宗の依経との勝劣を論じられたもので、特徴としてみられるものは、良観房忍性が鎌倉において、律僧としてより、阿弥陀信仰や真言密教を取り容れた信仰態度に変貌していく姿勢に対して、こうした著述を通して諸宗批判を展開していった事が考えられる。

文永八年は、春以来天候不順が続き、六月の雨期に入っても雨の気配はなく、農民達は極楽寺の良観房忍性の元へ走り、雨乞いの祈願を願い出た。六月十八日、良観房忍性は修法の僧百十余名を集め、稲村ヶ崎の海岸にかがり火をたき、壇を設けて祈願を行った。

『頼基陳状』（定一三五四）には、この子細が記されている。

去文永八年太歳辛未六月十八日大旱魃の時、彼御房祈雨の法を行ヒて万民をたすけんと付シ申候由、日蓮聖人聞キ給て、此体は小事なれども此次でに日蓮が法験を萬人に知らせばやと仰せありて、良観房の所へ仰せつかはすに云ク、七日ノ内にふらし給はば、日蓮が念仏無間と申ス法門すてて、良観上人の弟子と成リて二百五十戒持つ

べし。雨ふらぬほどならば、彼御房の持戒げ（気）なるが大狂惑は顕然なるべし。上代も祈雨に付て勝負を決シたる例これ多シ。所謂護命と傅教大師と、守敏と弘法と也。仍テ良観房の所へ周防房と入澤ノ入道と申ス念仏者を遣ハス。御房と入道は良観が弟子又念仏者也。いまに日蓮が法門を用ル事なし。是を以て勝負とせむ。七日ノ内に雨降ルならば、本の八斎会・念仏を以て往生すべしと思フべし。又雨ラずは一向に法華経になるべしといはれしかば、是等悦ヒて極楽寺の良観房に此由を申シ候けり。良観房悦ヒないて七日ノ内に雨ふらすべき由、弟子百二十余人頭より煙を出シ、声を天にひびかし、或は念仏、或は請雨経、或は法華経、或は八斎戒を説て種種に祈請す。四五日までに雨の気無ケレバ、たましゐを失て、多宝寺の弟子等数百人呼ヒ集メて力を尽て祈りたるに、七日ノ内に露ばかりも雨降らず。

とあり、祈雨は失敗し、さらに同抄に、

一丈ノ堀を不レル越ヘ者二丈三丈の堀を越へてんや。やすき雨をだにふらし給はず、況やかた（難）き往生成仏をや。然らば今よりは日蓮怨み給フ邪見をば是を以て翻ヘ給へ、後生をそろしくをぼし給はば、いそぎいそぎ来リ給へ、雨ふらす法と仏になる道をしへ奉らむ。

日蓮聖人は三度使者を送り、良観房忍性の行為を批判し、更に同抄に、

すみやかに其の祈りやめ給へと、第七日の申ノ時使者ありのまゝに申ス処に、良観房は涙を流す、弟子檀那同じく声をおしまず口惜しがる。

と、その顛末が記されている。

日蓮聖人の痛烈な批判をうけ、立場を失った良観房忍性に代って、浄光明寺行敏が七月八日、日蓮聖人に対して難状を呈した。

その内容は、「法華の前に説ける一切の諸経は皆是妄語にして出離の法に非ず。次には大小の戒律は世間を狂惑して悪道に堕せ令めるの法、次に念仏は無間地獄の業なり、そして禅宗は天魔の説、若し依て行ずる者は悪見を増長す」の四つの疑問を挙げ、これについて対面し、決着することを申し入れてきたのである。

日蓮聖人は、七月十三日に返書『行敏御房御返事』を送り、公場対決こそ本来願う所であり、行敏等が幕府に上申した訴状に対して著された『行敏訴状御会通』には、良観房忍性、法然の孫弟子念阿弥陀仏、道阿弥陀仏に対して、諸経の無得道を挙げ、禅宗や律宗に対し批判を行っている。

こうして、日蓮聖人と良観房忍性との対決は、これ以後全く見る事はなく、良観房忍性は日蓮聖人の前から姿を消してしまったのである。

九月十日、日蓮聖人は平左衛門頼綱と会見したが、翌々日十二日、松葉ヶ谷草庵に於て捕われの身となり、龍の口へ送られるのである。日蓮聖人はその後、佐渡流罪となり、本間六郎左衛門の邸へ送られ、十月十日、依智を発ち、二十一日に寺泊の津に到着、同二十八日、佐渡松ヶ崎に着き、十一月一日、塚原三昧堂に身を置く事になり、三ヶ年の流罪の生活が始まったのである。

文永九年（一二七二）二月に著された『開目抄』には、

今末法の始には良観・念阿等、偽書を注して将軍家にささぐ。あに三類の怨敵にあらずや。

と記している。

文永十一年二月十四日の赦免状が、三月八日、弟子日朗によって佐渡にもたらされ、十三日に佐渡を発ち、同二十六日、鎌倉に到着した。

赦免後の日蓮聖人に対する幕府の態度は以前と変わらず、四月二十二日には阿弥陀堂の加賀法印に祈雨の祈祷

を依頼、『北条九代記』には「四月十二日大雨草木枯稿」とあり、験のなかった事がわかる。

又、幕府にとって脅威の蒙古襲来について、『高橋入道殿御返事』（定一二八三）に、

蒙古国はいつよすべしと申せしかば、今年はよすべし、それにとって日蓮はなして日本国をたすくべき者一人もなし。たすからんとおもいしたうならば、日本國の念仏者と禅と律僧等が頸を切ってゆいの浜にかくべし。

と述べられて、日本国を亡ぼす根元が、禅や律、念仏者の謗法にある事を糾明し、日蓮聖人自身、法華経の行者としての生涯、上行菩薩として釈尊より託された仏勅を蒙った仏使としての使命を全うするため、身延山に入る決意をするのである。

文永十一年五月十二日、鎌倉を発ち、十七日、波木井の御身延に到着した。

一方、良観房忍性は、日蓮聖人が佐渡流罪中の文永九年、大仏谷に於て粥の供養を行っている外は、特に動きはみられなかった。

ところが良観房忍性は、建治元年（一二七五）、摂津の多田院の別当職となり、其の後約二十年間に亘り、多田院の復興にたずさわるのである。[9]

摂津の多田院は、源満仲が天禄元年（九七〇）建立の天台宗で、以後一族によって継承されたが、平家滅亡後は頼朝が御家人大内維義に知行させた。承久の乱後、次第に幕府による多田院支配が始まっていった。

文永九年（一二七二）、幕府は勧進聖恒念房の誓願により、多田院本堂改築についての費用の割当てを決めたが、多田荘にとっては大いなる負担となり、困難な状態に苦慮していた。良観房忍性は若い頃に接触をもった勧進聖と相計り、幕府に働きかけ、多田新田の開発を実現させ、本堂改築が軌道に乗る事になるのである。[10]

弘安四年（一二八二）、本堂供養の儀が奉修され、西大寺叡尊が導師を務めた。従来天台宗であった多田院に、西大寺流律宗が流入したのである。良観房忍性は、これを機に修理の資材や内陣の製作、当時大破していた三重塔の修理等を命じ、力を発揮していった。

日蓮聖人の身延期における遺文中、良観房忍性に対する批判は、建治元年（一二七五）に著された『種種御振舞御書』（定九七七）に、

今は念仏者をもやしなひ、持斎をも供養すまじ。念仏者・良観が弟子の持斎等が云、此の御房は謀叛の内に入りたりけるか。さて且々ありて世間しづまる。又念仏者集まりて僉議す。こうてあらんには、我等かつえしぬ（餓死）べし。いかにもして此法師を失はばや。既に国の者も大体つきぬ。いかんがせん。念仏者の長者唯阿弥陀仏、持斎の長者性諭房、良観が弟子ノ道観等、鎌倉に走り登て武蔵守殿に申す。此御房島に候ものならば、堂塔一宇も候べからず、僧一人も候まじ。

とあり、又、建治三年に著された『下山御消息』（定一三二五）には、

両火房内々諸方に讒言を企てて、余が口を塞がんとはげみし也。又経ニ云ク供ニ養スル汝ヲ者ハ堕ツ三悪道ニ云云。在世の阿羅漢を供養せし人尚三悪道脱シがたし。何ニ況や滅後の誑惑小律の法師をや。小戒の大科をばこれを以て可レ知ル。或は驢牛にも喩ヘたり。還て糞となる。或は狗犬にも譬たり。大乗の人の糞を食す。或は猨猴或は瓦礫と云云。然レバ時を辨へず機を知らずして小乗戒を持テば大乗の障りとなる。破れば又悪果を招く。其上、今の人々小律の者どもは大乗戒を小乗戒に盗ミ入れ、驢牛に牛乳を入れて大乗の人とあざむく。大偸盗の者大謗法の者、其のとがを論スれば、提婆達多も肩を竝べがたく瞿伽利尊者が足も及ばざる閻浮第一の大悪人也。

とあり、又、同年の『兵衛志殿御返事』（定一四〇五）には、

両火房は百万反の念仏をすゝめて人々の内をせきて、法華経のたねをたたんとはかるときくなり。

とある。

これらの遺文を通して、良観房忍性が、念阿や道阿等の念仏者の阿弥陀信仰と同化していった事が知られるのである。

五、日蓮聖人滅後の良観房忍性

日蓮聖人は弘安五年（一二八二）十月十三日、六十一歳を以て入滅。六十六歳の良観房忍性は、多田院での勢力を拡げ、新たな信仰形態をもつ「西大寺流」の律宗として発展していったのである。それは、念仏や真言密教との融合と、若年より吸収した回国聖としての文珠信仰や太子信仰、光明真言等が混合した独特のものであった。

正応元年（一二八八）、良観房忍性は西大寺に叡尊を訪ね、[11] 同三年、叡尊は示寂。西大寺は弟子信空が法燈を継承。後宇多天皇の帰依を得、全国の国分寺を西大寺の末寺とする院宣を下附され、西大寺流が広く流布することとなった。種子島慈恩寺が、興福寺の末寺から西大寺の末寺になったのも、この影響によるものである。[12]

良観房忍性は、同五年の特政令の混乱に乗じて、幕府に対し、西大寺、唐招提寺、般若寺、海龍王寺、額安寺、西琳寺、多田院、法華寺、道明寺など三十ヶ寺を将軍の祈願所として許可を得、晩年の永仁元年（一二九三）、東大寺大勧進に任ぜられ、翌二年には四天王寺の別当職に補された。悲田院、敬田院を再興、真言院を創立した。[13]

永仁六年（一二九八）、良観房忍性は鎌倉極楽寺に赴き、馬病舎を開設。正安二年（一三〇〇）には極楽寺境内

に熊野新宮を再興した。[14] 嘉元元年（一三〇三）七月十三日、良観房忍性は八十七歳で示寂した。

多田院に現存する『忍性菩薩略伝頌』には、生涯に亘る徳行が記されているが、永文八年の稲村ヶ崎での祈雨についての記載はない。

良観房忍性の生涯は、若年より回国聖として多くの民族信仰と受容し、叡尊に師事することによって念仏、真言等の信仰に同化し、幕府の権力に迎合し、世を渡った僧の姿をみる事ができる。

日蓮聖人は、良観房忍性とは対照的で、その信仰は、釈尊出世の本懐、法華経を最上の仏法と受け止め、理論的に法華経が末法の正法である事を立証し、国家の安泰は、仏法の邪正をわきまえ、正法護持に徹する事であり、生涯を生きぬいた姿をみることができるのである。

以下に、日蓮聖人と良観房忍性の年譜を付す。

日蓮聖人年譜	極楽寺良観房忍性年譜
承久四年（一二二二）　二・十六、安房小湊に生まれる。	健保五年（一二一七）　七・十七、大和国城嶋、伴氏の生れ。
天福元年（一二三三）　安房清澄山に入る。〈12歳〉	安貞二年（一二二八）　信貴山に入り、文殊信仰を学ぶ。〈11歳〉
嘉偵三年（一二三七）　師道善房に付いて剃髪。〈16歳〉	貞永元年（一二三二）　大和額安寺に入り、生駒竹林寺に入る。〈16歳〉
歴仁元年（一二三八）　鎌倉遊学。〈17歳〉	天福元年（一二三三）　東大寺戒壇院にて受戒。〈17歳〉

日蓮聖人年譜

仁治三年（一二四二）　清澄山に帰り、叡山に遊学。〈21歳〉

建長五年（一二五三）　四・二十八、清澄寺にて開宗。〈32歳〉

正嘉二年（一二五八）　岩本実相寺に一切経を閲覧。〈37歳〉

文応元年（一二六〇）　『立正安国論』を呈す。〈39歳〉

弘長元年（一二六一）　伊豆法難。〈40歳〉

弘長三年（一二六三）　伊豆流罪放免。〈42歳〉

文永元年（一二六四）　小松原法難。〈43歳〉

文永二年（一二六五）　上総茂原、小早川内を教化。〈44歳〉

文永四年（一二六七）　母妙蓮寂。〈46歳〉

文永五年（一二六八）　十一通の諫暁書を鎌倉の政権者と

極楽寺良観房忍性年譜

嘉禎元年（一二三五）　生駒竹林寺にて受戒〈19歳〉

仁治元年（一二四〇）　大和大寺叡尊の門に入り、通受十重戒を納める。〈24歳〉

寛元三年（一二四五）　家原寺に入り、別受受戒（密教）〈33歳〉

建長四年（一二五二）　常陸三村寺清涼院に入り、律席を啓く。三村寺主帰衣。〈36歳〉

弘長元年（一二六一）　相模に入り、時頼が鎌倉光泉寺の住持に招請す。〈45歳〉

弘長二年（一二六二）　叡尊、時頼の招きにより鎌倉に下向。〈46歳〉

文永二年（一二六五）　具支を行い、長時信者となる。江ノ島にて祈雨。〈49歳〉

文永四年（一二六七）　極楽寺に入り、開山。重時七回忌。〈51歳〉

寺院に呈す。〈47歳〉
文永八年（一二七一）　極楽寺良観房の祈雨を批判。龍の口法難。佐渡流罪。〈50歳〉
文永九年（一二七二）　『開目抄』を撰述。〈51歳〉
文永十年（一二七三）　『観心本尊抄』を撰述。〈52歳〉
文永十一年（一二七三）　流罪赦免。身延入山。蒙古襲来。〈53歳〉
弘安三年（一二八〇）　熱原法難。〈59歳〉
弘安四年（一二八一）　蒙古襲来。〈60歳〉
弘安五年（一二八二）　十・十三、池上にて六十一歳で入滅。

文永八年（一二七一）　稲村ヶ崎の海岸に修法の僧百十余名を集め祈雨するも失敗。〈55歳〉
文永九年（一二七二）　飢饉に対し難民を大仏谷に集め、粥を供養す。〈56歳〉
建治元年（一二七五）　極楽寺消失。摂津多田院の別当に任ぜられる。其の後、多田院の復興に二十年間たずさわる。
弘安元年（一二七八）　椎尾山に宝塔を建立。〈62歳〉
弘安四年（一二八一）　蒙古襲来に対し護国法を修し、稲村山にて仁王会を修す。〈65歳〉
弘安七年（一二八四）　永福寺・五大堂明王院・大仏堂別当となる。
弘安十年（一二八七）　極楽寺復興、金堂供養。〈71歳〉
正応元年（一二八八）　西大寺に叡尊を拝す。〈72歳〉
正応四年（一二九一）　戒壇を結し、別受法を修す。施薬・療病・悲田・施田院を造り、時宗は土州大恩荘を捨しその費用に充てる。〈75歳〉
永仁元年（一二九三）　東大寺復興、大勧進となる。〈77歳〉
永仁二年（一二九四）　四天王寺の主務となる。〈78歳〉

日蓮聖人年譜	極楽寺良観房忍性年譜
	永仁五年（一二九七）　西大寺にて叡尊の三回忌を修す。〈82歳〉 永仁六年（一二九八）　西大寺・唐招提寺・般若寺・海龍王寺・額安寺・西琳寺・多田院・法華寺・道明寺を祈祷所とし寺領安堵。以後、極楽寺へ帰る。熊野新宮・馬病舎を造る。〈83歳〉 嘉元元年（一三〇三）　清涼宮に祈雨。 七・十三、八十七歳で示寂。弟子二千七百四十人。

註

（1）『元享釈書』一三～二〇二頁、『本朝高僧伝』六一～三八四頁、『律苑僧宝伝』一三～二一八頁

（2）『律苑僧宝伝』一三～二一八頁

（3）『本朝高僧伝』六一～三八四頁

（4）『中世の南都仏教』追塩千尋著―忍性の宗教活動―　二九九頁

（5）『中世の南都仏教』追塩千尋著―忍性の宗教活動―　三〇三頁

（6）『元享釈書』三～二〇三頁、『律苑宝僧伝』一三～三八頁

（7）『叡尊・忍性』人物叢書　和島芳男著　吉川弘文館

（8）『本朝高僧伝』六一～三八四頁、『律苑宝僧伝』一三～二一八頁

（9）『叡尊・忍性』人物叢書　和島芳男著　一四〇頁
（10）『叡尊・忍性』人物叢書　和島芳男著　一四四頁
（11）『忍性菩薩略伝頌』（多田神社蔵）
（12）『種子島家譜』
（13）『叡尊・忍性』人物叢書　和島芳男著　一四九頁
（14）『叡尊・忍性』人物叢書　和島芳男著　一六〇頁

〈キーワード〉　西大寺　多田院　回国聖　雨乞い　開目抄